

第34回日本川崎病学会学術集会において

エコチル調査による川崎病の大規模出生コホート研究の紹介をしました

横浜市立大学大学院 医学研究科発生成育小児医療学 主任教授
(独) 国立成育医療研究センター 腎臓科 非常勤医師
エコチル調査メディカルサポートセンター 二次調査検討プロジェクトメンバー
伊藤秀一

2014年10月31日～11月1日に東京で開催された第34回日本川崎病学会学術集会において、「川崎病の大規模出生コホート研究について」の口頭発表を行いました。

川崎病の歴史を振り返りますと、1967年に小児科の川崎富作先生が、手足の指先から皮膚がむける症状を伴う小児の「急性熱性皮膚粘膜リンパ腺症候群」として発表された症候群が、新しい病気であることがわかりました。川崎富作先生の名前をとって川崎病という病名になりました。川崎病になると、心臓を養っている冠状動脈（冠動脈）の血管壁がもろくなって瘤（こぶ）になる場合があります。これが川崎病による冠動脈障害で、後遺症と呼ばれていますが、冠動脈障害により心筋梗塞や突然死を起こすことがあります。とくに日本人を含めアジア人に多く川崎病が発症することはわかっていますが、川崎病が発症する原因についてはまだ明らかになっていません。昨年も過去最高に患者数を記録し年々増加しています。

エコチル調査では質問票から子どもたちの川崎病発症の状況を把握するだけでなく、二次調査として発症したお子さんを対象により詳しい情報を収集しています。

この学術集会には川崎富作先生もご出席され、直々にエコチル調査は興味深く面白い研究であるとの講評をいただきました。学術集会参加者からの発言からもエコチル調査により川崎病の危険因子が解明できる可能性が期待されることを再認識しました。